JRCU JR東海労

東京地区分会情報

2016年2月26日
191号
発行責任者 管野政広

絶望する国日本と私たち

絶望する前にあがこう

大学生　佐藤　理沙　22
（東京都世田谷区）

九月二十三日の十八歳・高校生の投稿「世代間格差　政治に思つ」に同じくまだ社会に出ていない私は共感した。借金が一千兆円を超えたのに財政破綻しないのは、この額以上の個人資産があるからだろうか。なのに、政府は財政再建も人口減少も眼中になく、国民の資産を取り込むことしか考えていない。マイナンバー制度、派遣法改正、安保法成立、増え続ける税金。国民の利益（国民への還元）と意思を無視した政治は、確実に日本を悪化させている。

ミラー

広がり続ける経済格差に目を閉ざす世間、軍需産業でもうけようとする国、利己的な政府の高官、そんな国の現状を理解しようともしない大人たちさえいる。その全てに腹が立つ。だからこそ、考え、憂えて憤る投稿者の気持ちはよく分かる。政府の高給取りらのために働き納税するなんてまっぴらごめんだ。泥船にも乗りたくない。

けれど、日本を捨てる前に、私はこの国で一度あがいてみようと思つ。国全体を変えることはできない。でも、助け合いながら生きられる何かをつくることはできるかもしれない。国がダメになっても生きられるように、同じような考えを持つ人同士で集まりたい。それは小さな単位かもしれないけれど、大きな意味を持つと思う。

二十二歳の私が言えることではないけれど、十八歳はまだ若い。この国に絶望して海外移住を考えていると書いてあったが、その前に、一度社会に出て今と変わらない純粋な目で世の中を見てはどうだろう。私はそうしてみる。それでも同じ気持ちなら、海外移住も良いと思う。負の遺産ばかりを残す大人にそれを止める権利はない。

この投稿文は、昨年地方紙に載ったある大学生のものである。この投稿を前にして、私たちの有るべき姿がもの凄く問われている。ひしひしと無力感や罪悪感を覚えるのは、私だけだろうか？

投稿は、学生らしく希望に満ちているとは言えない。しかし、この歪んだ世の中の構造を洞察する彼女の感覚は、我々以上に研ぎ澄まされている。

子供６人に一人が貧困という先進国日本、実態経済を無視するアホノミクス政策はとうに限界を超えている。

現年金受給者が４千万人、若年層の不安定な雇用環境、すなわち一億総活躍社会とは、無年金国家（生涯労働）を意味している。

そしてなおも為政者たちは、失政のツケを「子孫に先送りする」という手口のみでいまだ生き長らえている。

若者たちの一切の希望をむしり取っておきながら、何が成長戦略なのか？その実態とは、格差、貧困、そして戦争への道でしかない。あまりにも古典的だ。なのに、こんな嘘つき詐欺政権を「支持率」で支える許しがたい大人たち。彼女が示したとおり絶望というほかない。

だが彼女は、健気にも絶望から再生の道を探ろうとただ一点だけを見つめている。なぜ私たちが同じ考えに至らないのか？本当に申し訳なく思う。だから組合員には、彼女たちの絶望に気づいてほしい。

ボケる前に国会前であがこう！

客観的だが、最近、労働組合のあり方に、疑問を感じている。無関心、自主規制、動員的、官僚的、このようなものが散見していないだろうか？振り返るべき時期だと思う。具体的にいえば、去年の８月１日の送り出しの朝ビラに、最初誰一人と意思を示さなかった。なぜ裁判をやったのだろう？そして、私たちの命ともいえる９条が、事実上破壊されようとしていた２０１５年の夏、私たちは、どのように過ごしていたのだろうか？少なくとも、シールズほど必死でなかったことは事実だ。

連日国会前には熱気があった。いろいろな思想が交錯し、そして蠢いていた。とても緊迫感がり連帯感があった。そして何より充実感があった。何故ならそこにいる誰もが廃案にできると信じていたからだ。労働者ならウンも寸もなく国会前向かうべきだった。

安倍晋三は、ついに９条改憲に言及した。「９条は立憲主義を空洞化させるもの」とまたも解釈を踏みにじった。明らかに民意への冒涜であり、宣戦布告である。

そしてこの機に及び、私たちの当然の権利である「デモや集会」を軽視する人達は、本気で平和を守ろうとする気持ちなどないと私は感じている。このままなら間違いなく憲法９条はこの世から消えていく。

だから奴らを通してはならない。